

†札幌市 ●北海道●
 旭屋書店札幌店 011(209)5181
 紀伊國屋書店札幌本店 011(231)2131
 ∴北大生協書籍部クラーク店 011(736)0916
 †小樽市
 喜久屋書店小樽店 0134(31)7077
 †旭川市
 ブックセンター富貴堂 0166(29)2888
 †秋田市 ●秋田県●
 ジュンク堂書店秋田店 018(884)1370
 西村書店 018(835)9611
 †盛岡市 ●岩手県●
 ジュンク堂書店盛岡店 019(601)6161
 †山形市 ●山形県●
 高陽堂書店 023(631)6001
 †仙台市 ●宮城県●
 アイエ医書センター 022(221)7266
 金港堂パークタウン店 022(377)8088
 ジュンク堂書店仙台店 022(265)5656
 八文字屋書店 022(371)1988
 丸善仙台アエル店 022(264)0151
 ∴福祉工房国見堂 022(271)8979
 †郡山市 ●福島県●
 岩瀬書店富久山店 024(936)2220
 †福島市
 ∴福島県立医大BC 024(548)2533
 †下都賀郡 ●栃木県●
 ∴広川書店獨協医大店 0282(86)2960
 †前橋市 ●群馬県●
 煥乎堂 027(235)8111
 戸田書店前橋本店 027(223)9011
 文真堂BA前橋店 027(280)3322
 †太田市
 文真堂BA太田店 0276(40)1900
 †つくば市 ●茨城県●
 ∴丸善筑波大学会館店 029(858)0409
 ∴丸善筑波第二学群店 029(858)0421
 †さいたま市 ●埼玉県●
 ジュンク堂書店大宮店 048(640)3111
 須原屋本店 048(822)5321
 ブックデポ書楽 048(859)4946
 †入間郡
 ∴文光堂埼玉医大店 0492(95)2170
 †千葉市 ●千葉県●
 志学書店 043(224)7111

常備店一覧

†川崎市 ●神奈川県●
 有隣堂川崎BE店医学書C 044(200)6831
 あおい書店川崎駅前店 044(233)6518
 丸善ラゾーナ川崎店 044(520)1869
 †相模原市
 ∴有隣堂北里大売店 042(778)5201
 †伊勢原市
 ∴丸善東海大伊勢原売店 0463(91)0460
 †横須賀市
 平坂書房モアーズ店 046(822)2655
 †横浜市
 紀伊國屋書店横浜店 045(450)5901
 有隣堂本店 045(261)1231
 有隣堂ルミネ横浜店 045(453)0811
 ブックファースト青葉台店 045(989)1781
 ACADEMIA 港北店 045(914)3320
 †厚木市
 有隣堂厚木店 046(223)4111
 くまざわ書店本厚木店 046(230)7077
 †藤沢市
 有隣堂藤沢店 0466(26)1411
 †千代田区 ●東京都●
 三省堂書店神保町本店 03(3233)3312
 有隣堂ヨドバシAKIBA店 03(5298)7474
 東京堂書店 03(3291)5181
 メジカルブックス 03(5280)0456
 丸善丸の内本店 03(5288)8881
 ∴Maruzen Sophia Shop 03(3238)3013
 †中央区
 旭屋書店銀座店 03(3573)4936
 八重洲ブックセンター 03(3281)1811
 丸善日本橋店 03(6214)2001
 †文京区
 文光堂書店 03(3815)3521
 †新宿区
 紀伊國屋書店新宿本店 03(3354)0131
 紀伊國屋書店新宿南店 03(5361)3315
 芳林堂書店高田馬場店 03(3208)0241
 ジュンク堂書店新宿店 03(5363)1300
 ∴仁誠堂書店 03(3353)1211
 ∴三省堂書店東京女子医大店 03(3203)8346
 †中野区
 あおい書店中野本店 03(3319)5161

†渋谷区
 有隣堂渋谷医学書センター 03(5728)5170
 †板橋区
 文進堂書店 03(3964)3305
 ∴文光堂板橋日大店 03(3958)5224
 †大田区
 ∴東邦稲垣書店 03(3766)0068
 †豊島区
 旭屋書店池袋店 03(3986)0311
 ジュンク堂書店池袋店 03(5956)6111
 リプロ池袋店 03(5949)2910
 †墨田区
 くまざわ書店錦糸町店 03(5610)3034
 †世田谷区
 星和書店 03(3304)2199
 †武蔵野市
 啓文堂書店吉祥寺店 0422(79)5070
 †立川市
 オリオン書房ノルテ店 042(522)1231
 †甲府市 ●山梨県●
 朗月堂書店本店 055(228)7356
 †中巨摩郡
 明倫堂書店 055(274)4331
 †長野市 ●長野県●
 平安堂長野店 026(224)4550
 †松本市
 明倫堂書店 0263(35)4312
 †新潟市 ●新潟県●
 考古堂書店 025(229)4050
 西村書店 025(223)2388
 ジュンク堂書店新潟店 025(374)4411
 †富山市 ●富山県●
 ブックスなかだ本店 076(492)1192
 明文堂書店新庄経堂店 076(494)3530
 †高岡市
 文苑堂書店福田本店 0766(27)7800
 †金沢市 ●石川県●
 うつのみや本店 076(234)8111
 ブックスなかだ金沢本店 076(220)5011
 明文堂書店金沢県庁前本店 076(239)4400
 †福井市 ●福井県●
 勝木書店二の宮店 0776(27)4678

学術通信

IWASAKI ACADEMIC PUBLISHER NEWS

No. 90

2009 = 初春

目次

- 論文・エッセイ● 沖縄からの手紙 蟻塚 亮二 2
- 自閉症の施設職員との出会いで学んだこと 小林 隆児 6
- 柔構造、または療法家の「いい加減さ」
について 岡野憲一郎 10
- 誰も知らないNobody Knows 鈴木 誠 14
- 書評エッセンス● 統合失調症からの回復 5
- 解離性障害 13
- 臨床現場に生かすクライン派精神分析 16
- 情報版● 書誌 2008.10～12 17
- 巻末付録● 新刊案内 = 2008冬

● 万一店頭にご希望の品がない場合にも、お取り寄せできますのでご注文下さい。なお、∴印は大学等の学内店です。
 ● 上記以外の書店でもご注文頂けます。
 (2008.03.31 現在)

自閉症の施設職員との出会いで 学んだこと

小林 隆児

はや15年近く経過したが、平成6年(1994)の春、筆者は九州から関東に移った。四半世紀を九州で過ごし、発達障害、とりわけ自閉症のような発達に深刻な問題を抱えている人々に対する臨床に取り組んできたことは、他では得がたい貴重な財産であった。それゆえ九州を去る時は断腸の思いであったが、なんとかこれまでに学んだことを形にしておくことで恩返しをとの思いもあってまとめたのが、201例の自閉症追跡調査研究(Journal of Autism and Developmental Disorders, 22(3), 395-411, 1992)であった。この仕事を通して痛感したのは、長年の経過観察では自閉症といわれる人々の予後に大きな幅があるということであった。当然といえば当然の帰結である。

こばやし・りゅうじ=児童精神医学
大正大学人間学部人間福祉学科臨床心理学専攻教授。著書に「自閉症の発達精神病理と治療」,「自閉症と行動障害」(以上、岩崎学術出版社),「自閉症の関係障害臨床」,「自閉症とことばの成り立ち」(以上、ミネルヴァ書房),「よくわかる自閉症」(法研),「自閉症の関係発達臨床」(日本評論社)など多数。このほど、「自閉症とことばの臨床」を執筆・刊行。

追跡調査研究の意義はその結果を今後の自閉症療育にどう活かすかにかかっている。そんな思いでいた時、筆者は「九」君と「州」君の事例(拙著「自閉症の発達精神病理と治療」岩崎学術出版社、症例11 K子)に大きな影響を受け、自閉症の人々とのコミュニケーションの基盤づくりの大切さと可能性を見出した。そしてそのことが、新たな職場で関係発達臨床の実践の場 Mother-Infant Unit を作ろうという気持ちを引き出してくれた。

ちょうど同じ頃、新たに自閉症者の入所施設が生まれ、そこで囑託医として関与してくれないかという要請を受けた。こうして筆者は乳幼児期の自閉症に対する関係発達臨床の実験的試みに従事すると同時に、その成果を青年期・成人期自閉症の療育にも試みる機会を持つことができた。今から思えば、またとない貴重な機会を同時に得たことになる。

この施設職員の大半は、自閉症についてはほとんど素人同然であった。筆者は意図的に、彼らに自閉症についての概論めいた話をあまり行わなかった。彼

らに先入観を植え付けたくなかったのもあるが、凄まじい行動障害を示す自閉症の人々と直接関わるのは筆者にとってほとんど初めての体験であったし、さほど参考になるものもなかったからである。職員はみな体当たりで取り組んでくれた。筆者は少なくとも月に2回はでかけ、事例検討の時間をたっぷりとして彼らと一緒に考えることを大切にされた。

職員たちの報告は、自閉症の人々と関わる中で感じたこと、さらにはどのようにそれに応じてきたかが丁寧に語られていた。行動障害を示す人々のところの動きが鮮やかに浮き彫りになり、筆者はただただ彼らの報告から学ぶばかりであった。

熱心に取り組んでいた多くの職員の中で、いつも感心するほど克明な報告をする数名の中に、小冊「自閉症とことばの臨床」の共著者である原田(旧姓齊藤)理歩さんと、そこで実践を報告している原鉄男さんがいた。この二人の報告は毎回驚きの連続であった。いつも筆者の期待や想像以上の内容を語ってくれた。筆者は次第に毎回彼らの報告を聞くのを心待ちにするようになった。

彼らの関与のスタンスは、一言で言えば、素朴そのものであった。ほとんどことばのない世界であるが、驚くほどの感性でもって自閉症者のところの動きを感じ取り、それに応じていた。その裏づけになっているのが、常にあらゆるところに気を配りながら、緻密な観察を絶やさないことであった。身体面の変化に対しても、彼らは看護師以上とも言ってい

ほどに鋭い観察眼を兼ね備えていた。それは遠くからの冷めた眼ではなく、暖かで慈愛に満ちた眼であった。観察された内容も、彼らが直接関わる中で自らの身体を通して感じ取っていることがひしひしと伝わってきた。その一端は以下の原田さんの報告に見て取ることができるように思う。

〔「自閉症とことばの臨床」原田理歩さんの記述から、pp.138-140〕

ある土曜日の朝、朝食の時間でした。Bさんは食堂に行っており、私は居住棟の方にいました。突然「ウギャー〜ウオッ、ウオッ!」と、食堂と居住棟の間をつなぐ廊下付近から、聞き慣れない大きな声がしました。

何事かと私が驚いて声のした方へ行こうとすると、突然、ものすごいスピードと勢いで、大ジャンプしながらBさんが現れました。その額には脂汗をかき、必死な様子で私の目の前までやってきて左手で私の手をぎゅっと掴み、右手を挙げて「マッ! マッ!」と何か訴えてきます。私は訳がわからず、「どうしたの?」と聞いた瞬間、Bさんの目がキッと鋭く光り、あっ、と思った瞬間には、ゴンッ!と思いつき鈍い音を立てて、私は眉間に頭突きをされていました。私はあまりの痛さに目も開けられず、しゃがみ込んでしまいました。しかしBさんは、しゃがみ込む私の背中の中へ出ているところへ、さらにもう一発、ドンッ!と頭突きをしてくれました。

「これはただごとではない……。」と、痛いけれどどうずくまっているわけにもいかず、

でも立ち上がることもできずに困り果てているところへ、騒ぎを聞きつけた男性職員が駆けつけ、間に入ってくれました。食堂にいた職員も騒ぎを聞きつけて来てくれたので食事の機子を尋ねたのですが、特に混乱する場面はなかったとのことでした。

しかし、あの声といい、この他碍といい、何か理由があるはず……と、ふとBさんを見ると、なにやら歩き方がおかしいのです。そこで嫌がるBさんをなんとか男性職員に抱きかかえてもらいながら足を調べてみると、足首に傷があり赤く腫れ上がっていました。「そうか。けがしちゃったね。痛かったね。」と私が言うと、一瞬Bさんと私の目が合いました。その鋭い視線にどきりしました。そして次の瞬間、後ろからBさんを抱きかかえていた職員のおごに、後頭部で思い切り頭突きをしました。

本書での彼らの記述はこのようなスタイルで書かれている。二人がいかにも自閉症者の身体の動きを敏感に感じ取り、全体の流れの中でその意味を読み解き、対応しているかがよくわかる。自らの身体を通して感じとったことを語っているからこそ、われわれにも臨場感をもって伝わってくるのであろう。

このような取り組みは二人をはじめ職員たちに多大な負担と不安をもたらしていたことも事実であった。渦身創痕ともいえるほどみんなどこかに生傷を負っていた。今でもその時の後遺症が続いている、と原田さんがぼつりと語ったことを思い出す。

これほどまでに杜絶な臨床現場での取

り組みが、なぜ彼らには可能だったのであろうか。原田さんは「目の前にいる相手に対して『治療』というような意識を持ったこともなく、相手と自分（たち）が、どうしたら一緒に（できれば心地よく）過ごすことができるかを考えてきました」とさりさりと言うだけであった。

本当のところは筆者にも分からないが、以下の記述から多少なりとも推し量れるものがあるように思う。

（『自閉症とこころの臨床』原田理歩さんの記述から、pp.157-159）

Bさんとのコミュニケーションがお互いにわかりやすい形でとれるようになってきた頃のことです。Bさんの大好きなドライブに行き、園に帰ってきてからBさんはコーラを飲んでいました。その日の買い物は、Bさんが何を買いたいのかとてもわかりやすく私に伝えてくれたので、私もBさんもお互いほっとした感じがありました。あまりにゆったりとコーラを飲むBさんを見ているうちに、私はつい、向かいに座っていたBさんに「もっともっとBさんの言っていることがわかるようになりたいよ。がんばるね」と言ってしまいました。するとBさんは、コーラの缶から口を離し、ちょっと首をかしげながらじっと私を見つめました。そしておもむろに、口からコーラをびゅーっと私めがけて吹きかけてきたのです。コーラまみれになった私はびっくりしてBさんを見ると、真剣な、でも穏やかな顔をして、ちょっとだけ頬をピンクにして私をじっと見つめ返し、すぐに視線をはずしてコーラを飲み始めまし

た。私は、とても恥ずかしくなりました。ちょっとBさんのことがわかるようになってきたからといって、こんなことを口にした自分にもあきれましたが、何より、そんな私に対しBさんが、「そんなに簡単じゃないよ。そんなに頑張らなくてもいいよ」と、言葉ではないけれどはっきりと私に届く形で伝えてくれたことにハッとさせられました。私がBさんのことをわかるよりずっと、Bさんは私のことをよくわかっているのだと気付かされました。戒められたのと同時に、なぜか余計な力が抜け、とても励まされたような感じがしました。

育児に忙殺される母親の大変さを支えているのは、母親しか味わうことのできない子どもとの深いこころの交流である、とはよく言われることであるが、それと一脈通じるようなものを、原田さんは感じ取っているのではないか。

それにしても昨今の発達障害ブームは、子どものこころの臨床現場に何をもたらしたのであろうか。発達障害に対する世の関心を高めたことは確かであろうが、子どものこころの理解は深まるどころか、そこから遠ざかるばかりのように思えてならない。小書で原田さんたちが示している発達障害の人々のこころのありようをみていくと、彼らがいかにわれわれとのこころのつながりを求めているか、そのための実践がいかに大変な作業かと痛切に思う。いとも簡単に発達障害というラベルを貼り、あとは療育現場の人々に預けてしまうことの多い精神科医

療の実態を見るにつけ、自らの診療行為がこころのつながりを結果的に断ち切ってしまう現実とわれわれはもっと気づく必要があるのではないか。

最後に本書を送ったお礼に感想を寄せて下さった小倉清氏（おぐらクリニック院長）からのお手紙を紹介し、氏への感謝の気持ちを込めて筆を置くことにしよう。

発達障害の人々への「こころの臨床」について、臨床の場でここまで具体的に細かく述べられた初めての本ではないでしょうか。

しかし、この治療にかかわられた人々が示している resilience（回復力）とでもいふべきものには感服させられます。こんなに長いスパンであきらめずじっくりと取り組もうという生き方はどこからくるものかと思えます。考え方とか、臨床的態度というよりは生き方というべきでしょう。

しかし、私たち精神科の臨床にたずさわる者は常にこの生き方が求められているし、また自らも求めねばならないでしょう。それは果たして訓練によって作られるものかどうか、頭で分かってゆくものなのかどうか、と思えます。（下線は小倉氏自身によって）

障害の種類を問わず、どなたに対してもその支援は結局そういうことに尽きるものでしょう。この本はそのことを明らかにしているものともいえると思いました。